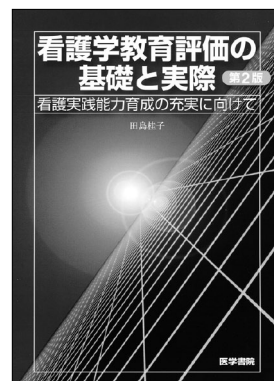


『看護学教育評価の基礎と実際 看護実践能力育成の充実に向けて 第2版』

時代を超える普遍性を追求した看護学教育評価論

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657
著：田島桂子／定価 2,940 円(本体 2,800 円＋税 5%)



本書は、初版発行後 20 年の時を経て改訂されたものである。このことは、不変であろう本質論を説いた初版の内容でさえ再検討せざるを得ないほど看護学教育を取り巻く状況が変化したことを意味していると解釈されるかもしれないが、実はそうではなく、変化したからこそそれを踏まえつつ今一度本質論に立ち戻る必要がある、との著者からの警鐘であった。

著者が言及する本質論の 1 つめは、教育内容の精選である。教育評価の根本的考え方は、教育者が学習者に対してこうなって欲しいというねがいを教育目標として掲げ、目標達成を意図した教育活動を行い、その結果学習者が目標を達成したかどうかを見極める、というものである。したがって教育評価を論じることは教育目標を論じることであり、教育目標を論じることは教育内容の精選を論じることにつながる。このことが著者が最初に強調している本質論である。

教育内容の精選について著者は、第 4 章において看護技術及び看護行為の構造を論じ、看護技術を構成する最小単位としての『基本動作』という考え方を紹介している。一見教育評価論議ではないように読めるが、さまざまな看護技術を抽出してそれらを構成する基本動作を整理することが評価内容(教育内容)の精選につながるという主張である。最小単位として何を学んでおけば状況の変

化に応じて看護を創造できるのか、すなわち看護実践能力の中核をなす「考えて創り出す」能力育成につながるのかを論じた、著者ならではの切り口だと思う。技術の定義においては多少異なった意見があるかもしれないが、複雑な看護行為を構造化して見せてくれる内容に「なるほど」と読者はきっと合点がいくだろう。

本質論の 2 つめは評価方法である。第 5 章で実に多様な評価方法が具体的に紹介されている。しかも、認知領域・精神運動領域・情意領域の 3 つの領域ごとに主体的・自主的学びにつながるような評価方法が紹介されている。具体的ではあるが、決して評価のマニュアルではなく、本質論にもとづいた具体例であるゆえに、十分に応用が利く具体例となっている。

本質論の 3 つめは「学修」「教授-学修過程」という表記である。なぜ「学習」「教授-学習過程」ではないのだろうか。著者の哲学に裏打ちされて展開される本書の本質論を探る読み手側の切り口にもなる。

看護学基礎教育課程に学ぶ学生の評価だけでなく、教育課程の評価および学生による授業評価、継続教育の評価にまで言及した守備範囲の広い、しかし、徹底的に教育評価の本質を追求する本書は、看護学教育評価に携わる人々にとって、時代を超える普遍性を持ち合わせた有用な一冊となるだろう。